

ただ愛の中でのみひとは客体と一つになる

—— 初期ヘーゲル思想とヘルダーリン・1 ——

竹 島 あ ゆ み

ヘーゲル (Georg Wilhelm Friedrich Hegel) は、ヘルダーリンと同じく1770年に生まれ¹、1831年に没した。その生涯の中で「初期ヘーゲル」、「若きヘーゲル」と称されるのは、1801年イエーナ大学の私講師となるまでの時期である。

この時期は、通常さらに以下の三つに細分される²。

1) テュービンゲン期 (1788-93) : テュービンゲン神学校在学時代。

—— 民衆宗教構想とキリスト教批判

2) ベルン期 (1793-96) : ベルンのフォン・シュタイガー家の家庭教師時代。

—— カント哲学への傾斜、理性的道徳宗教

3) フランクフルト期 (1797-1800) : フランクフルトのゴーゲル家の家庭教師時代。

—— カント批判と合一哲学、愛による運命との和解構想

ヘルダーリンからの影響は上記の全ての時期を通して見られるが、とりわけベルン期末期からフランクフルト期末期までの時期に起こった、ヘーゲルの思想における二回の重要な転機に関して、ヘルダーリンの影響は大きかった (その程度に議論はあるにしても)³。本論ではこの観点から、フランクフルト期を中心にヘーゲル初期思想を概観したい。

1 同年生まれにはベートーベンやフランスの作家セナンクールがいる。本報告は、彼らの思索をめぐる研究プロジェクト「1770年生まれ思想家・文学者・芸術家をめぐるヨーロッパ地域文化研究」(2014年度岡山大学文学部プロジェクト研究)の第2回報告会において竹島が行った研究報告をもとにしている。

竹島あゆみ「愛による運命との和解——初期ヘーゲル思想とヘルダーリン」、岡山大学、2015. 3. 27。

2 初期ヘーゲルについての詳しいクロノロジーは以下を参照。本論では必要に応じてこれによる文献番号を(Nr.67)のように示す。ただし2014年に出版されたアカデミー版ヘーゲル全集第2巻では年代決定が修正されている場合があるので、その場合は註記する。

Schüler, G: Zur Chronologie von Hegels Jugendschriften. In: *Hegel-Studien* 2 Bonn: Bouvier 1963.

3 この点については細谷(1971)、Henrich(1971)、Jamme(1983)、久保(1993)等を参照。

この二つの転機のうち、まず第一の転機(ベルン期からフランクフルト期へ)では、ヘルダーリンの影響下にカント主義から合一哲学への転回が起こっている。この合一哲学とは何か。さしあたってここでは先行研究にならい、〈愛による主客の合一を志向する哲学である〉と簡単に定義しておこう⁴。

第二の転機(フランクフルト期の前半から後半へ)では、再びヘルダーリンの影響下に、合一哲学の内部で、反省と分離の契機を否定する立場から、容認する立場への転回が起こっている。これらの転回の時系列について、あらかじめ簡潔に見取り図を示すと次頁のようになる。本稿ではまず第一の転回を扱う。

1. テュービンゲン期からベルン期まで

本節では第一の転回に至るまでの最初期のヘーゲルの思想を概観する。

1788年から1793年にかけてのテュービンゲン・シュティフト時代のヘーゲルは、同室のヘルダーリン・シュリングと親交を結び、啓蒙、フランス革命と並んで古代ギリシャへの憧憬を共通に抱いていた。この時期のヘーゲルは古典古代ギリシャのポリスを理想的共同体とみなしていた。後のフランクフルト期において、ヘルダーリンの影響下に新たな意味を付与され、重要視されることになる「愛」の概念も、この時期にはまだギリシャ的共同体観との関連で考察されている。ヘーゲルはポリスをモデルとして全体と個人、政治と宗教、理性と感性が調和した共同体を構想する。その紐帯となるのが、古代ギリシャの多神教的宗教をモデルとした民衆宗教 Volksreligion であり、これが生から遊離した同時代のキリスト教に代わるものと期待されている。

ヘーゲルはこの時期の断片『民衆宗教とキリスト教』のなかで、キリスト教を「客体的宗教」と呼び、それを人間の生から切り離され、「冷たい認識や言葉の羅列」(GW1, 92)であり、悟性と記憶とを原理とするものとして激しく批判する。それに対して民衆宗教は「主体的宗教」と呼ばれ、古代ギリシャの信仰と同じように、「感性」・「心胸」・「想像力」といったものと「理性」との調和に基づくものとして構想されている⁵。ヘーゲルは「民衆を理性宗教に導いて、それを受け入れさせる」(GW1, 100) 道を模索しているが、そのためには「想像力と心胸とがよい方向をとること」(GW1, 101) が重要であるとする。この時期に「理性」と呼ばれるものの内実は、しかし後年のヘーゲルにおける理性概念とは大きく異なるものであった。ここでは理性は愛と不可分なものであった。ヘーゲルは次のように書いている。

4 例えばヘンリッヒによれば、ヘルダーリンの影響下に「愛は彼〔ヘーゲル〕にとってもすでに…自然と自由、主体と客体とを…不可分の統一をつくるように結びつける統合力となった」(Henrich (1971), 26) とされる。この時期のヘーゲルはこのような「合一」としての愛を、また「存在」とも呼んでいるが、この用語法はヘルダーリンのそれを忠実に踏襲している。

5 「客体的宗教」と「主体的宗教」という区別については、テュービンゲン・シュティフトで用いられていたコンペンディウム及びそれをういたシュトールの講義の影響によることが指摘されている。藤田(1986)18。

ベルン期(1793-1796) …カント的理性の自律



第一の転回(1796頃)——カント主義から合一哲学へ

ヘーゲル

ヘルダーリン

1796 ⁶ 『道徳性・愛・宗教』(Nr.67)の後半以降	1794-95 『ヒュペーリオン』予稿群 1795 『判断と存在』 1795.09.04 「シラー宛て書簡」 * 1796.01 フランクフルトのゴンタルト家の家庭教師となる。(ゴンタルト夫人ズゼッテと出会う) 1796.05-12 『ヒュペーリオン』第一部最終稿
* 1797.01 フランクフルト・ゴージェル家の家庭教師となる。	
1796末-1797初頭 ⁷ 『ドイツ観念論最古の体系プログラム』(Nr.56)	
* 1797 フランクフルト-ホンブルク・サークルの成立(ヘルダーリン、シンクレーア、ツヴェイリングら)	
1797 『愛』初稿(Nr.69)	1797.04 『ヒュペーリオン』第一部出版
1798 ⁸ 『愛と宗教』(Nr.68)	



第二の転回(1798頃)——反省と分裂の契機の受容

ヘーゲル

ヘルダーリン

1798-99秋～冬『キリスト教の精神』初稿(Nr.83) ⁹	1797-1798.9頃 『エンペドクレスの死』初稿 * 1798.09 ゴンタルト家を辞し、ホンブルグへ
1798-99秋～冬『愛』改稿(Nr.84)	* 1798.11 ラーシュタットのシンクレーアのもとに滞在、共和主義者たちと知り合う。
1799-1800『キリスト教の精神』改稿(Nr.89)	1799.01 「弟カール宛書簡」 1799秋 『ヒュペーリオン』第二部 1799以後 『エンペドクレスの死』二稿 1799秋 『エンペドクレスの基底』 1799.9以後 『エンペドクレスの死』三稿

6 シューラーによって1797年7月以前と推定されていたが、全集第2巻では1796年執筆に修正(GW2, 634)。注13も参照。

7 シューラーによって1797年7月以前と推定されていたものを修正(GW2, 665)。

8 1797年夏と推定されていたものを修正(GW2, 639)。

9 Nr.83, 89については、全集第2巻では全体を7つの断片に区別して細かい年代決定を行っているが、本稿では割愛する(GW2, 644-49)。

「愛が他の人間のうちに自己自身を見出し、あるいはむしろ他者において自己自身を忘れることにより自己を自分の現存の外に置き、いわば他者の中で生き、感じ、活動している限り、愛は何か理性と似たものを持っている。」(ibid.)。

この表現は、とりわけプラトンの『パイドロス』の「あたかも、鏡の中に自分の姿を見るように、自分を愛している人の中に、自分自身をみとめているのだ」(255D)という一節を思わせる。ローゼンクランツの『ヘーゲル伝』には、この時期のヘーゲルは、カント、ヤコービ、ヒッペルなどと並んで、プラトンをヘルダーリンらと共に読みかつ議論したと伝えられている¹⁰。

さて1793年からのベルン期のヘーゲルの思索の特徴は一言でいってカント主義への傾斜である。この時期に書いたシェリング宛の手紙の中で、ヘーゲルは次のように述べている。

「私は少し前から再びカント哲学の研究に取り組み、その重要な成果を……多くの理念に適用しようとしている」¹¹(Br. 1, 16)。

「私はカントの体系とその最高の完成からドイツにおける革命を期待している」¹²(Br. 1, 23)。

この時期のヘーゲルは、同時代の支配的宗教たるキリスト教を批判し、それに代わる宗教を求めるという点ではテュービンゲン期の課題を引き継いでいる。しかしこの課題にこたえるものとして、カント主義を考えているという点がベルン期の特徴といえる。ここでは、人を自己の外なる権威へと隷属させるキリスト教の他律性が、「実定性 Positivität」という用語で捉えられ、批判の対象となる。その克服の方策として民衆宗教を対置するのではなく、カント的な理性の自律によってユダヤ教の他律性を乗り越える道が模索されている。

ヘーゲルは1795年に書かれた『イエスの生涯』の中で、イエスを超人的な存在ではなく、いわば道徳の教師として描き出し、カントの定言命法を語らせている。

「汝らが何を望むにせよ、それが人々の間での普遍的規則として、汝らに対しても妥当するように、そのような格率に従って行為せよ。——これが道徳の根本法則である。——これがあらゆる立法の内容であり、またあらゆる民族の聖なる書物の内容である」(GW1, 221)

イエスは、「文字に縛られた、自分の外から命じられた通りの信仰」しか知らないユダヤ人に対して「理性自身から法則を作り出し、自由にその法則を信じそれに従う権利」を教えようとするのである(vgl. GW1, 243)。

また『キリスト教の実定性』(1795/96年)ではカント的な理性を感性に対置して次のように述

10 Vgl. Rozsenkranz(1977),40.

11 1795年1月末シェリング宛書簡。

12 1795年4月16日付シェリング宛書簡。

べている。

「永遠の真理がその本性からして必然的かつ普遍妥当的であるのならば、もっぱら理性の本質にのみ基礎づけられるべきであって、理性にとって偶然的な外的感性界の現象に基礎づけられるべきではない」(GW1, 291)。

2. 第一の転回——カント主義から合一哲学へ

このようなカント主義からのヘーゲルの離脱は、一体いつどのように起こったのだろうか。D.ヘンリッヒによれば、ノールによって『道徳性・愛・宗教』(Nr. 67)と題された断片の前半と後半の間に——おそらくは数週間の断絶をおいて——カント主義から合一哲学への転回が起こっているという¹³。

「テキストの前半はまだカント的な基礎に立って論証しているのに反して、その後半では、まったく別の理論的な方向づけが始まっている。……ヘーゲルはこの断片の中で、実践理性の主観的自由に〈愛〉を対置した。愛は実践理性の自由とはまったく別のもっと高次の自由、すなわち自分の対象を自己と〈合一させる〉という自由を持つ」(Henrich(1971), 63f.)。

たしかにヘンリッヒのいうように、前半では実定的なものへの批判とともに、道徳的・実践的信仰が中心的主題として論じられている。また前半において合一の構想が示されていないのはもちろん、「愛 Liebe」という言葉自体も登場しない。ここでの主題は、例えば次の引用からも明らかに見てとれよう。

「信仰が実定的と呼ばれるのは、そのうちで実践的なものが理論的に現存し、根源的には主体的なものが単に客体的なものとして現存する場合にである。……実践的活動は自由に行われ、対立の合一も、対立するものに規定されることもない。実践的活動は、与えられた多様なものへと統一をもたらすのではなく、統一そのものである。……あらゆる道徳的命令は、この統一を諸衝動に対して主張する要求である」(GW2, 5)。

それに対し、後半では、道徳的信仰から離れて、主体と客体との合一が主題をなしている。しかもそこで愛が重要な役割を演じている。

13 ヘンリッヒは更に、ノールがひとつながりのものとして編集したこのテキストを、前半・後半それぞれ独立した二つのテキストとして扱うことを提案しているが、全集第2巻でのテキスト・クリティークはそれを支持する形になっており、前半はText40、後半はText41と独立の番号がふられている。年代決定については両方共「1795-1796、おそらくは1796」とされているが、後者についてはフランクフルト期の執筆の可能性も排除できないとする(GW2, 634)。

「主体と客体——あるいは自由と自然が合一していると考えられ、自然が自由であり、主体と客体が分離されえないところ、そこに神的なものが存在する。……ただ愛においてのみ、ひとは客体と一つになり、客体は支配することも支配されることもない。この愛が、想像力によって存在とされると、神的なものとなる」(GW2, 9)。

「愛が生じうるのは、同等なものに対して、私たちの本質の鏡像とこだまに対してのみである」¹⁴ (ibid.)。

この転回は、これに続く時期に書かれたと思われる諸テクストを通覧することによって、よりはっきりと読み取ることができる。

例えば『愛』初稿(Nr. 69)では次のように言われる。

「真の合一、本来の愛は生けるものの中でのみ生じる。……真の合一はすべての対立を排除する。それは悟性ではない。悟性の諸関係は、多様をいつまでも多様のままにしておき、その統一そのものが対立である。それは理性ではない。理性は自分の規定する活動を規定されたものに端的に対立させる。……愛は感情である」。(GW2, 84)

この時期のヘーゲルは、フランクフルト-ホンブルク・サークルに加わって、その思想的影響を受けていたと思われる。フランクフルト-ホンブルク・サークルとは、当時フランクフルト及び近郊のホンブルクに住んでいた、ヘーゲル、ヘルダーリン、ツヴィリング、シンクレアといった青年たちの「精神の同盟」(Br. Bd. 1, 394f.)¹⁵ともいべき集まりであり、プラトン主義、ヤコービ経由のスピノザ主義、フランス革命への共感、共和主義的政治傾向などを共有していた¹⁶。

その中でもとりわけヘーゲルに大きな影響を与えたのはヘルダーリンの思想であった。この時期のヘルダーリンの「合一哲学」構想とは、端的に言えば、「愛」を合一の原理とした諸対立の合一を志向するものである。この構想はヘルダーリン自身の思索の発展の中で変化を遂げ、最初は「愛」により個人の内面における諸衝動や、個人間の結びつきがもたらされるとするにとどまっていたが、やがては「一にして全`Εν και Πάν」なる根源的な「存在」(これはまた文脈により「美」・「生」・「自然」とも言われる)が、合一・分裂・合一の回復という自己還帰の運動を示すとされるようになる。

14 この一節も前節で引用した『パイドロス』の一節を思わせる。それでは「転回」の前と後で同じように、「愛」の思想に対するプラトンの影響が見られることになり、「転回」したことにはならないのではないかという疑問が生じるかもしれない。しかし「転回」と言ってもヘーゲルの思索の全てが変更されたわけではなく、テュービンゲン期から変わらず持ち越されているものも当然ある。本稿で詳しく立ち入ることはできないが、プラトンからの影響はその一つである。その他、既に触れたキリスト教の実定性批判や共和主義的傾向などもそうである。

15 シンクレアの1812年2月5日付ヘーゲル宛書簡。この中でシンクレアは、彼らの若き日の交流を回想し、このように呼んでいる。

16 Vgl. Jamme u. Pöggeler(1981).

それをヘーゲルの転回の唯一の、あるいは主たる原因とみなせるかどうかは別として、少なくともヘルダーリンの『ヒュペーリオン』予稿群、『判断と存在』、『ヒュペーリオン』第一部等にかがえるこの合一哲学構想が、この時期のヘーゲルの思索に大きな影響を与えたことは間違いないであろう。ヘルダーリンのこの合一哲学構想の萌芽は、例えば『ヒュペーリオン韻文稿散文草案』の次のような箇所に見て取ることができよう。

「私たちは、自分を自由にし、高貴にし、無限へと進もうとする衝動を否定することはできません。……しかしながら、制約されたい、受容されたいという衝動もまた否定することはできません。……私たちはこの矛盾する衝動と衝動との闘いの中で破滅せざるをえないでしょう。しかし愛がこれらの衝動を合一するのです (die Liebe vereinigt sie)。愛は最高のもの、最善のものを目指して無限に努力します (Sie strebt unendlich nach dem Höchsten und Besten)。……私たちの本質のあの最高の欲求に促されて、自然に我々の内なる不滅なものとの親近性を付与し、物質の中にひとつの精神のあることを信ずるのは、この愛なのです」(StA. III, 194)。

1794年11月から1795年1月にかけて書かれたこの草稿では、ヘルダーリンは愛を合一の原理と考えてはいるが、それはまだ人間の内なる衝動の二重性を克服するという視点から考えられているにとどまる。ここには1974年11月からのイエーナ滞在とフィヒテの講義の聴講、シラーとの親交等の影響がかがえる。特に「無限に努力」といった言葉づかいは、フィヒテの知識学から直接に由来するものとみてよいであろう¹⁷。

しかしその後、1975年4月から5月にかけて書かれた『判断と存在』で、ヘルダーリンは、フィヒテ『知識学』の第一原則「自我は自我である」を、「判断 Urtheil」として、意識のもたらす「客体と主体との根源的分割…原-分割 Ur-Theilung」(StA, IV, 216)として批判するに至る。フィヒテの考える「同一性」は「決して完全な形で生じる客体と主体との合一ではない」(StA, IV, 217)。これに対して全き合一を表す用語として「存在」が用いられる。

「存在——は、主体と客体との結合を表現する」(StA, IV, 216)。

このような〈存在による根源的合一〉の概念はヒュペーリオン第一部(1794年4月)において、〈生の合一〉として結実する。

「すべてと一つになること、それが神性の生である。それが人間の天命である。

生けるすべてのものと一つになること、至福の自己忘却のうちに自然のすべてのものの中へ再び帰ってゆくこと、それは人の思想と喜びとの頂点である。……生けるすべてのものと一つになる！この言葉とともに、道徳はその怒れる鎧を、人間の知性はその王笏を捨てる。そして

17 例えば1795年1月26日付のヘーゲル宛書簡には、フィヒテ『知識学』における「自我と非我の相互規定」、「アンチノミー」と並んで「努力」を評価する記述がある。Vgl. Br.1, 20.

あらゆる思想は、永遠に一なる世界の像を前にして消えていく。……そして鉄のごとき運命も、その支配を断念する。そして諸々の存在の結合によって死は消え、分かつことのできない統一と永遠の青春が、世界を幸福にし、美しくするのだ」(StA. III, 9)。

このような根源的合一は、さらに〈合一・分裂・再合一〉という生の自己分裂と自己還帰のプロセスに展開されていくことになる。

「血管は心臓で別れ、心臓に帰る。すべては一つの、永遠の、燃えあがる生である」(StA. III, 160)。

さてしかし、ヘーゲルにおいてもヘルダーリンにおいても、この時期の両者の合一哲学では、対立する両項の合一が単純に語られているにすぎない。そこでは対立と合一を軸とした生の存在論が、〈存在・生・自然の根源的合一が、意識による分裂を経て、合一へと自己還帰する〉という構想で示されるが、それはまだいわば単純な対立からの単純な回復という以上のものではない。そこには、なぜ、またいかにして対立が生じるのか、そしてなぜその対立が解消しうるのかといった視点が欠けている。

対立の必然性と、それゆえの合一の必然性が視野に入ってくるにはこの後の転回を待たなければならない。

文献表

ヘーゲルの著作

Gesammelte Werke. In Verbindung mit der Deutschen Forschungsgemeinschaft. Hrsg. von Rheinisch-Westfälischen Akademie der Wissenschaften, Hamburg: Felix Meiner, 1968ff. [=GW]

GW1: *Frühe Schriften I*. Hrsg. von F. Nicolin u. G. Schüler, Bd. 1, 1989.

GW2: *Frühe Schriften II*. Hrsg. von W. Jaeschke, Bd. 2, 2014.

Briefe von und an Hegel. Hrsg. v. J. Hoffmeister, 2. Aufl., Bd. 1-4. Hamburg: Felix Meiner, 1952. [=Br]

ヘルダーリンの著作

Sämtliche Werke. Hrsg. von Friedrich Beißner. 8 Bde. Stuttgart: Kohlhammer, 1946-1985. [=StA]

『ヘルダーリン全集』 手塚富雄他訳、河出書房、一九六六～六九年。

二次文献

藤田正勝(1986)：『若きヘーゲル』創文社。

Henrich, D.(1971): *Hegel im Kontext*. Frankfurt a. M.: Suhrkamp.

中野肇監訳『ヘーゲル哲学のコンテクスト』、哲書房、一九八七年。

細谷貞雄(1971)：『若きヘーゲルの研究』、未来社。

Jamme, Ch. u. Pöggeler, O. (hrsg.) (1981) : *Homburg vor der Höhe in der deutschen Geistesgeschichte: Studien zum Freundeskreis um Hegel und Hölderlin*. Stuttgart: Klett-Cotta.

久保陽一訳『ヘーゲル、ヘルダーリンとその仲間』、公論社、一九八五年。

Jamme, Ch.(1983): *"Ein ungelehrtes Buch": die philosophische Gemeinschaft zwischen Hölderlin und Hegel in Frankfurt 1797-1800*. Bonn: Bouvier.

久保陽一(1993)：『初期ヘーゲル哲学研究』、東京大学出版会。

Rosenkranz, K. (1977) : *Georg Wilhelm Friedrich Hegels Leben*. Nachdruck der 1. Auflage. (Berlin 1844). Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft.

中野肇訳『ヘーゲル伝』、みすず書房、一九八三年。

